

見附市教育センターだより



〒954-0052

見附市学校町2-7-9

電話/Fax 0258-62-2343

E-mail mrisen@mitsuke-ngt.ed.jp

令和5年11月21日 NO.8

今町小 一階教室出窓から

弥彦山を望む

「サンコウチョウ」(JR 見附駅の思い出)

すこやかルーム指導員 小川 義実



「先生、話が長いね。」「私の言うこと聞いている？」すこやかルームの中学3年生から時々投げかけられる文句(?)である。確かに若いころから話が長かった。

「発問は短く、児童の考えを引き出して・・・」との教育実習で受けた指導もむなしく、現在に至っている。

今年の夏、長野県原村のペンションで、サンコウチョウのさえずりを聞いた。姿は見えないが、見附駅のプラットホームで聞く「日、月、星、ホイホイホイ」と、聞こえるあれである。本物をフィールドスコープで捉えてから20数年が経っている。

ある日、その見附駅の3番線プラットホームで「この鳥は何という鳥ですか?」と、隣りに座った女性から質問を受けた。「なぜ、私にそれを問う?」と思ったが、簡単に説明した後に「見附にカッコウはいるのでしょうかね。」と、重ねて質問が投げかけられ調子に乗ってしまった。「刈谷田川→草むら→オオヨシキリ→托卵→・・・」と、大した知識もないのに長々説明をしてしまったのだ。

会話が進むにつれて、その女性から「今日が最後の見附です。家族のみんなは、1時間ほど前に最後の引っ越しのトラックで、新潟の新しい家に行ったんですが、トラックに乗り切れなかった私は、電車でこれから新潟に行くんです・・・。」と、身の上話を始められた。「この鳥何という鳥ですか?」は、「今日は天気がいいですね。」等の社交辞令で、本当は自分の話を聞いてほしかったのかもしれないと、やっと気づかされた。そうしているうちに、3番線に電車が滑り込んで来て、話は途切れてしまった。

教師という仕事は、話をする、話を聞いてくれる前提で仕事が成り立っている。しかし、話をするのは教師だけではない。話をする主役は子どもたちだ。話をしたり、活動したりする先に、事実に基づいた「いいね。さすがだね。」の教師の誉め言葉を待っているのだ。その話の場や活動の場をうまく提供できるかどうかは、教師の力量にかかっている。

適応指導教室に勤務して、すでに数年が経過しようとしている。通室する児童生徒が当該校の担任や関係の教職員と定期的に面談する機会がある。その翌日に「どうだった?」と、質問をすると「どうせ、俺なんかの話は聞いてくれないし・・・」との耳が痛い言葉があるのも事実である。私のようにならないためにも、もう少し気遣いをしてほしいと思っている。

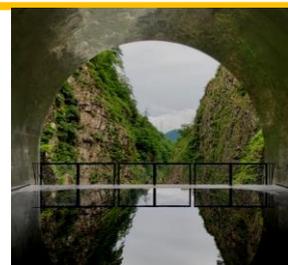
原村のペンションでは、京都からの夫婦と夕食も朝食も隣席になり会話が弾んだ。おしゃべり数を測る機器があれば、6対4で京都夫婦の勝ちであったろう。対大人となれば、おしゃべりの私も気遣いできるのだ。

今日も、すこやかルームの1日は、朝早くから「ねー、先生聞いてきて、聞いてきて。」と1番の来室者とのトークから始まる。話が終わる最後に「少し、話は短くなったかな。」と気遣って尋ねても「ぜんぜん。」と冷たい返事。修業は常に道半ばである。

巻頭写真に寄せて 「お気に入りの窓」

◇10月末になり紅葉の便りが聞かれ、魚沼の観光地「清津峡溪谷トンネル」を訪ねてみたいと調べると、この週末より予約が必要とわかった。以前より溪谷トンネルはあったが、5年前の“大地の芸術祭”で、建築家によってアート作品に改修され、観光スポットとなった。予約は無理とあきらめて、越後湯沢駅前の有名な蕎麦屋へ出かけたが、駅の駐車場に、ずらっと観光バスが並び、全てが清津峡溪谷トンネル観光であった。溪谷トンネル観光ツアーは、大人気である。

◇さて、師がくで訪れる今町小学校で、このトンネルと同じように見える窓がある。校舎一階の教室についている出窓である。正しくは、教室にある手洗いの窓である。(右写真)2年生側の教室から広々した田んぼ、北陸自動車道、その先に弥彦山が望めるが、この景色を丸い出窓から見ると、溪谷トンネルに匹敵する絶景に見える。(巻頭写真)私は、この窓から四季それぞれの美しさを堪能しているが、どこの学校でも美しさを感じられる場所があると思う。勤務する学校のお気に入りの場所で、ちょっと息抜きをされてはどうだろう。



清津峡溪谷トンネル



今町小の一階出窓



コラム 「支え合う」ことの大切さを恩師の姿に学ぶ

◇今夏の猛暑その後も残暑、11月に入ってから夏が続く、地球の温暖化で寒い時期がなくなり、日本から四季が消えてしまうのではと心配になった。中旬になり、この時期の寒さになり、ほっとしている。

◇さて今春、私は顔が皮膚病になり、医師から「日光を浴びないよう」と指導を受け、日焼け止めクリームと帽子を手放せない日々を送った。

◇I 中学校の10月の師がくで、体育授業が陸上競技の長距離走で、グラウンドで実施をされ、病気とはいえ、生徒の近くで参観をした。しかし、長い時間は無理で、グラウンド脇の校舎とプールの中程にある二本の樹木(右写真)の下で参観した。この二本は巨木で松(写真の黄丸)とエノキ(赤丸)が、根元部分がくっつくように生えている。それが近すぎ、松もエノキも斜め(中写真)に生育している。特に丈の伸びた松は、立派な三本の添え木で立っている。(下写真)授業は木陰で無事に参観できたが、樹木を見て、恩師ご夫妻を考えてしまった。

◇恩師は、私が若い頃に勤務した学校の校長先生で、90歳を越えられた今も元気である。奥様は今年、米寿を迎えられた。数年前に大病をされ、二人暮らしなのであるが、家事一切は恩師(夫)がやっている。三食の食事や掃除・洗濯等の他、奥様の体のマッサージが、朝一番の大切な日課である。つまり老々介護をされているのである。私は仕事帰りに時々寄せて頂くのだが、奥様の「今日はお仕事? ご苦労だったわねえ」、恩師の「貴方がそろそろ来そうな気がしてお菓子を…」の言葉で迎えられ、三人でお茶をする楽しい時間を過ごさせてもらってきた。この長距離走の師がくがあった翌日、半月前に再度倒れられて、入院をされていた奥様が亡くなられた。恩師はエノキとして松の木と支え合い、また三本の添え木になって、松の木をしっかりと支えておられた。葬儀での憔悴された恩師の姿が痛々しかった。恩師に言われた「貴方が顔を出してくれると妻に笑顔が増えた…」の言葉は嬉しかったが、仲睦ましく生活をされていた二人の姿に接することの出来ない寂しさで一杯である。と同時に、一日も早く恩師に元気になって欲しいと願うばかりである。(こ)



4時から特別夢塾 「要約して伝えよう」

10月11日(水)に、新潟大学附属長岡小学校の小湊雄一先生から、見附小学校3年3組で、国語の説明文「パラリンピックが目指すもの」の学習で示範授業、ミニ講座で指導を頂いた。指導の様子を簡単に記す。

1 授業の様子・・・パラリンピックのことを伝えたい

○ 本時のテーマ 「パラリンピックが目指すものとは何か」

T：目指すものを伝えるには、①～⑪のどの段落を見るとよいか？

C：⑩段落、⑪段落に詳しく書いてあると思う。

C：でも、これだと(字数が)いっぱいに入らない。

→ 入り切らない…短くまとめたい。

◎ 短くまとめるためには、⑩⑪どちらの言葉を使うとよいか。

T：大事な言葉や文は、どの段落に書かれているのでしょうか。

C：⑩段落に、勇気・強い意志・インスピレーション・公平

C：⑩と⑪の両方の段落に、多様さ・だれもが

T：⑩と⑪はつながっている。→ 題名とのつながり

まとめ；だれもが「平等に活躍できる社会の実現」を目指すためのもの

2 ミニ講座 「授業づくりはじめの一步」

○ 授業づくりの出発点は？ ・児童理解・教材研究・指導法研究

○ 要約とは ・物事を端的にわかりやすくまとめ直すこと

○ 要約に関わる資質・能力を引き出す・・・直観から論理へ →まず直観に働きかけることで、論理的に考える必然性を生み、論理的に考える手掛かりへと導く

○ 授業者と学習者で学習問題◎を紡ぎ出す →ズレを生かして追求問題◎を紡ぎ出す

○ 書いてあることを手掛かりにして思考する →見方・考え方を働かせながら◎の解決へ

= 国語科授業づくりのポイント =

1 子どもの姿を起点として授業づくりを考える →子どもの姿を生み出している原因を

2 子どもにとってどのような価値があるかという視点で教材分析をする

3 導入では子どもの直観に働きかける 主活動では子どもの論理に働きかける

4 子どもの成長を願い、研鑽を積み学び続ける

<参加者の声> ・要約するという活動の重要性を改めて感じた。「字数内に入らない」ということから、◎に繋げ、常用語句、文章を子どもたちが見つけていく学習が勉強になった。

・要約の仕方や説明文を一番大事な所から読むこと、横に繋げる言葉の大切さが印象に残った。

・これまで低位の子に合わせてきたが、子ども同士の練り合いの授業を大切にしたいと思った。

・子どもの発言や考え、反応を拾いながら授業をつくっていく様子が見れ、大変勉強になった。

・子どもが悩むだろうことを想定し、誤答も含めてみんなで検討することの大切さを感じた。

・子どもの考えを大切にして、その考えを練り上げていく素敵な授業で、大変に勉強になった。



小湊 雄一 先生



4時から夢塾 不登校の「子どもの声」が聞こえていますか？

10月17日(火)に、心と学びの相談・支援センター代表の吉沢嘉一郎先生から、表題の演題で指導を頂いた。指導内容を簡単に紹介する。

1 はじめに・・・子どもの心の声を受け止めること

- どこまでも寄り添う…信頼関係ができると子どもの内なる声が、おのずと聞こえてくる。気になっていることを伝え、寄り添い方を話したい。
- 理想を掲げることが大切…理想は現実を変えることができる。



吉沢嘉一郎 先生

2 相談・支援センターでの対応事例・・・「どのように寄り添うか？」

(1) 大規模校から田んぼの見える小規模校へ転校した小2：Oさん

- ・ 2年生時の担任の捉え・きまりを破る身勝手な子ども。→不登校に
- ・ 5年生の担任・良い点を見つけて褒めた。多動傾向のOさんに合う授業を行った。

→発達障害がある等を言わせることを求めない。現れるその子の行動特性に適切に対応を。

(2) 合唱コンクールが終わった途端に登校拒否した中2：Mさん(ピアノ伴奏担当者)

- ・ 練習時、男子に苦勞をした。担任はMさんに任せていた。学級がまとまっていなかった。
- 補助員さんがMさんを理解してくれた。母の話から「安心感のある学級づくり」を始めた。



3 まとめとして・・・「寄り添うことの具体的内容」

- (1) この子の問題、気になることから良さを見出す。→『褒めることから良さが見えてくる』
- (2) この子を褒めるのではなく、この子の良さに感服する。
→『心の底から笑顔で、全身で認め、褒める』
- (3) この子に約束を求めるのではなく、この子への約束を守る。
- (4) この子を教師の目で外から見ず、この子と同じ人間として接する。
- (5) この子の答えを言葉で求めず、この子の体全体の雰囲気を感じ取る。
- (6) 穏やかな笑顔は子どもを安心させる。校長室の鏡はそのためにある。
- (7) 授業が独りよがりな教師は、現場教師としての資質に欠ける。
- (8) 子どもの理解はその子の全体を理解すること、常に複数の目が必要。
- (9) 子どもの目は全てを語る。目を見て本気で聞く、的を得て語る。
- (10) 何よりも子どもと遊び、笑い、これから先の生活を考え続ける。



4 学校はいい・・・大きな力を先生方は持っている。研鑽を積み、子どもたちを助けて欲しい。

<参加者の声> ・具体的な子どもの姿で取り組みを教えてください、とても参考になった。

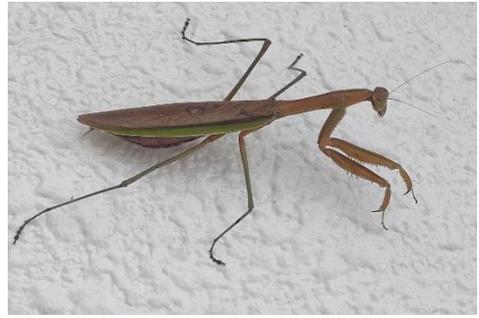
- ・子どもをどのように理解することが大切なのかという内容が、すうっと心に入っていた。
- ・教師・担任の環境要因で不登校を生んでしまう。反対に、この関わりの中で不登校を救うことができることを改めて学んだ。子どもの側に立てる、見方であり続ける教師でありたい。
- ・自分の思いで、子どもたちに接していたかもしれない。寄り添い、話を聞く姿勢でいきたい。
- ・自分の目配りや子どもとの接し方を振り返り、思い当たることに気付けた良い時間になった。
- ・事例を聞き、普段の指導や授業づくり、学級づくりに見直しや工夫が必要だと改めて思った。



11月



科学教育部



《今月の1枚》
オオカマキリ 葛巻1にて

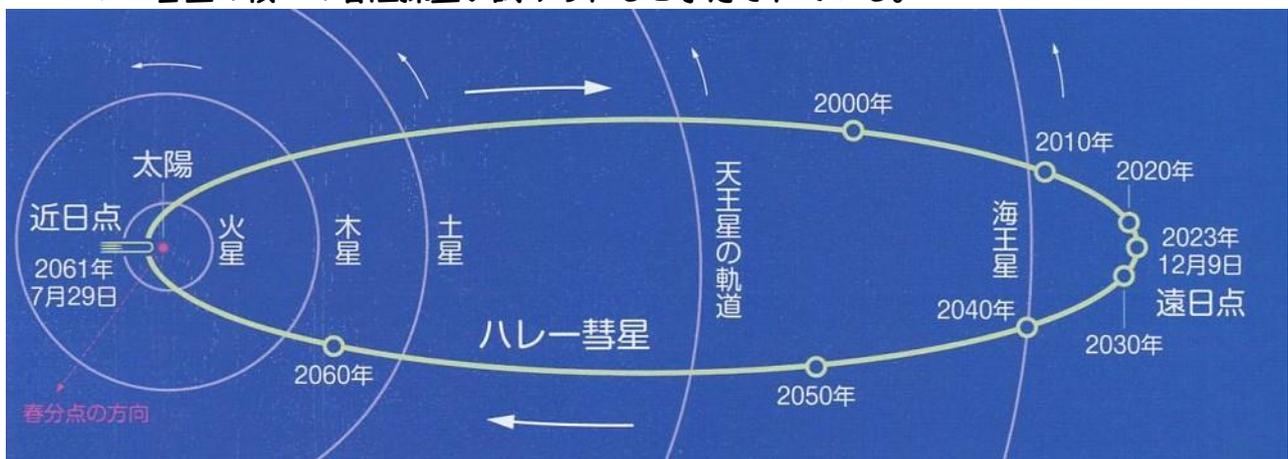
「ハレー彗星」が太陽を目指して回帰

昨年度の「センターだより1月号」で「ズィーティーエフ（ZTF）彗星」について紹介しました。残念ながら、科学教育部では観測できませんでした。協力員が人生で初めて彗星の名前を耳にしたのが「ハレー彗星」です。姿は写真でしか見ることしかできませんでした。なつかしくなって、調べてみると次のようなことがわかりました。

- ・前回地球に接近して大きな話題になったのは1986年。(①)
- ・およそ76年周期で太陽をめぐる。(②)
- ・2023年12月9日に海王星の軌道の外側で遠日点に達する。
- ・再びUターンに転じ、太陽を目指して回帰の道を歩み始める。
- ・遠日点に到達するのは2023年12月9日の4時で、距離はおよそ53億km。
- ・次回地球へ接近するのは2061年夏。
- ・北の空に0等級の長い尾を引いた姿を見せてくれると予想されている。
- ・ハレー彗星の核への着陸探査が試みられると予想されている。



1986年に地球に接近したハレー彗星



協力員が小学校高学年の時に、①②がニュース番組で報道されていたのを思い出しました。次回地球へ接近するのは2061年夏ということで、現在小学校6年生が50歳を迎えるころにハレー彗星が地球に接近します。また、ハレー彗星の核への着陸探査が試みられると予想されています。世界で初めて小惑星イトカワからサンプルリターンに成功した日本の技術が受け継がれているといいですね。

引用文献 富山市科学博物館ホームページ（最終閲覧2023年11月10日）
星空年鑑2023 (株)アストロアーツ

新生代：更新世 中期 段丘形成の時代



隆起（海水が下がる、大地が上がる）で低かった土地が山と同じくらの高さになり、少し大きい石が見れるようになった。

新生代：更新世 前期 海が退く時代

魚沼層
杉沢
第二小
近辺
白～灰色
火山灰
守門岳の
噴火



火山灰が含まれることから守門火山が活動している時代と推測できる。

(露頭として見られる地層の写真に情報と、考察を書き加えた)

(昔の刈谷田川の様子)



(今の刈谷田川の様子)



(中越水害時)



課題③ 「見附」という地形がどのようにできたのか仮説ストーリーを立てよう

課題③

「見附」の地形がどのようにできたのか、刈谷田川の水害の歴史などから考え、土地の成り立ちと河川の影響について考えました。

見附市は主に平野だが上流はV字谷ぼく、下流に行くにつれて平野になっていく。つまり扇状地。

見附の土地



仮説③

春がすごい水量。大量の水で勢いが増した刈谷田川はグニグニしたところで洪水を起こしたのでは



(マップの地形図を基に説明)

(刈谷田川の航空写真に書き加えた)

生徒は火山灰などを調べる姿や、情報カードを持って行って議論を交わす姿がありました。授業で学習した火成岩を撮影し、説明に使うことやスクリーンショットを撮影し、上流からの流れを画面上で辿るなど工夫を凝らして仮説ストーリーを作成しました。他の課題を選択したグループから、情報をもらうなどの姿も見られました。

地域素材を使うことで、興味をもって学習に取り組むことができ、現地に行けないなどの足りない部分をICTで補うことで、様々な情報を取捨選択しながら自己の考えを形成することにつながりました。

《授業で使用した参考文献・資料》

- ・高橋尚晴「見附市地質見学案内書」, 2013
- ・見附市教育センター科学教育部「見附市地層調査」, 2018

当センター科学教育部兼任所員の早田浩延先生（見附中）からご寄稿いただきました。